

スペイン語通時音韻論の諸問題

原 誠

最近 大阪外国語大学の伊藤太吾氏から同氏の論文2点の抜刷を頂戴した。一つは伊藤太吾：イスパニア語のラムブダキスムス「大阪外国語大学学報50周年記念号29. 35-44 (1973) であり、もう一つは伊藤太吾：口蓋子音の生成についての考察「大阪外国語大学Estudios Hispánicos」3.74-97 (1973) である。前者は1973年6月3日に大阪大学教養部で開催された第9回日本ロマンス語学会大会の席上伊藤氏にお目にかかった時に頂戴した。しかし怠惰なことでは人後に落ちない評者のことゆえ直ぐには同論文を拝読しはしなかった。それから一か月後に上記学会での評者の研究発表を文章に直し始めた際、同論文の内容が評者の研究発表の内容に関係があるのではないかとふと思ひ立ち拝読した次第である。しかしこの論文だけだったら評者は恐らくこのような拙い論評などは書かなかつたであろう。ところが8月上旬になって伊藤氏はもう一方の論文を郵送して下さった。これの方は直ちに読ませていただいた。いずれもスペイン語史上の重要な問題を取り上げて居られ、評者としてもいささか感ずるところがあったので、個人的なお手紙を差し上げて感想を述べるよりも書評のような形をとった方が、評者に二点も論文を献呈して下さった伊藤氏のご好意によりよく報いられるのではないかと考え、このような形で評者の感想を述べることにした。

まず評者が伊藤氏に最も申し上げたいことを先に書いてしまうならば、非常に有望な将来性を持って居られ、かつ色々日本では手に入りにくい文献を数多く読んで居られることはこの二点の論文からだけでもわかり過ぎるほどわかるのであるが、惜しいかなこれら二つのテーマをとり上げる際にどうしても読んでおかねばならない文献が抜けているように思われる。しかもその読み落としの文献が偶然音変化現象を言語内的原因によって説明しようとする傾向を持ったもの、つまり構造主義的傾向を持ったものばかりのように思われる。もちろん伊藤氏が音変化を構造主義的に説明することがお好きでないのかもしれませんが、またそれならそれで致し方のないことである、というのは評者はガリガリの構造主義者ではないにしても、音変化の説明に比較的構造主義的見方を優先的に取り入れる傾向があり、この点で伊藤氏と評者とで意見が喰い違ってしまうことがあり得るかもしれないからである。その場合は評者としては伊藤氏にこういう見方もあるということを知っていただければもうそれだけで評者の本懐であると言ってよいと思う。

ところで伊藤氏の論文は二点とも1973年に発表されたもので区別しにくいので、

便宜上「ラムブダキスムス」の方を伊藤,1973a、「口蓋子音の生成」の方を伊藤,1973bと表記することによって区別させていただく。

A. 伊藤,1973a

まず冒頭のⅠ)において伊藤氏は標題の「ラムブダキスムス」について説明を加え、それからこの論文はいかなる問題に答えるものであるかを明らかにして居られる。「ラムブダキスムス」ということばは非常に聞き馴れないことばで、人によっては「キサな名前をつけたものだ」と思うかもしれない。評者がこの論文を最後まで読んだところでは、このことばはラテン語の2重子音-Ll-の、ロマンス諸語における諸変化結果を指すものらしい。また伊藤氏がこの論文で答えるとする問題というのは4つあり、①他のロマンス諸語と比較してみた場合イベリヤ半島ではラムブダキスムスのいかなる分布が得られるか、②その分布の原因はどう説明するか、③それらの顕現形は音韻史上どのようにして生成したのか、④問題となる変化の生成年代はいつごろなのか、がそれらである。

Ⅱ)では伊藤氏はGrieraの説への反論として唱えられたMenéndez Pidalのかの有名な南イタリアから北スペインへの移住説に対し首をかしげておられる。この説は非常に大胆な仮説であるが、説得力に欠けることは伊藤氏ならずとも認めざるを得ない。評者も原 誠：イベリヤ半島における俗ラテン語の音声分化(下)「東京外国語大学論集」20, 1-10 (1970)のpp. 5-6において同じような疑念を呈しておいた。従ってこのⅡ)における伊藤氏の主張には評者も賛意を表す。しかし小さな問題がいくつかあるようだ。それらを順を追ってとり上げることにしよう。

P.36の1.5から1.6にかけて伊藤氏は「・・・,第二にアラビア語の影響を質的にも量的にも最も大きく被っていると言う二点は認めざるを得ない。」と述べて居られるが、この部分には注(4)がついている。その注(4)では「しかし、アラビア語の影響と言っても、語彙項目に於けるものの方が音韻項目に比して大きい」と書いてある。しかし評者の知る限り、音韻項目に対するアラビア語の影響は見つけ難いとするのが現在のスペイン語学界の常識となっており、伊藤氏がここで具体的にどういう現象を思い描いて居られるのか知りたく思う。

P.36の1.7から1.8にかけては「嘗て、イベリア人種がコーカサス地方から渡来したという義論(sic!)に際し、その経路はピレネー山脈経由とアフリカ経由の二つが主張された事があったが、・・・」と書かれている。しかしLapesa: *Historia de la Lengua Española*,⁴ Madrid, 1959のP.20を見ると、イベリア人種がアフリカ経由でコーカサスから渡来したとは書いてなく、バスク語の起源には北アフリカ説とコーカサス説とがあると書いてあるのみである。とにかく イベリヤ人種が北アフリカを経てコーカサスから渡来したと

いう説は評者には初耳である。

1.9ではさきほどちょっと触れたGrieraの説が紹介されているが、残念ながら Grieraの何という文献の何ページに出ているかということはひとつも書いてない。そういう欠陥が他の部分にも見られる。他方では文献について記すべきことがすべて記されている箇所もあるので、評者としてはこの不統一をどう解釈したらいいのかよくわからない。引用文献の出所、出版または発表の年次その他を明記することは論文を書く者が守らねばならない最低の約束であるから、伊藤氏にも評者はぜひこれを守っていただきたいと思う。

1.14以降各所で伊藤氏はRamón Menéndez Pidalのことを M. Pidal というふう
に記して居られるが、これはまずいと思う。このように書くと M. が名前のよう
に思われる。しかし実際には彼の父方の姓であるから、やはり面倒でもMenéndez
Pidalと書くべきだろう。

同じくP.36の1.33から3行にわたって伊藤氏は「・・・場合によってはアメリカに於ける方が変化の生成の時期が早いという事実はどの様に説明されるだろうか」と書いて居られるが、評者としてはやはりここはもっと具体的に書いてほしかった。この部分を読んで評者が直ぐ思い出すのは A. Alonso : Estudios Lingüísticos : Temas Hispanoamericanos, Madrid, 1953の中の P.196以降で A. Alonso が yeísmo が発生したのはスペイン本国よりも中南米の方が早いことをそこで主張しているのであるが、この説は Galmés de Fuentes : Lleyeísmo y otras cuestiones lingüísticas en un relato morisco del siglo XVII ESTUDIOS DEDICADOS A MENENDEZ PIDAL 7. 273-307 (1956) によって見事にくつがえされてしまった。この間の経緯については 原 誠 : 中南米のスペイン語 (その6) — 「中南米のスペイン語 (その3) : yeísmo について」に対する補足 — 「イスパニカ」 11. 42-57 (1966) がくわしい。伊藤氏はこのような文献があったことをご存知だったのだろうか? なお上記引用文の末尾についている注の(8)という番号は(7)の誤りである。また Lenz の基層説には支持者は皆無である。

Ⅲ) の前半は Harri Meier と Sanchís Guarner の説の紹介であり、後半は Menéndez Pidal の南イタリアから北スペインへの移住説の続きで、ここでも伊藤氏は Menéndez Pidal の仮説に首をかしげて居られる。

この部分につき評者が特記すべきことは何もないが、ここでもやはり Harri Meier と Sanchís Guarner の説につき その出典が明記されていないのは残念なことである。また伊藤氏は Sanchís Guarner のことを M. S. Guarner と書いて居られるが、これまた好ましくないと思う。

Ⅳ) においてはラテン語の -LL- の諸変化結果が特に南イタリアについて、主として Menéndez Pidal の説くところに従って紹介されている。その冒頭の部分、つ

まりP.37の1.32において、「博士の観察によれば、Venezia以北は背舌口蓋音であるが、残りのCampaniaと半島南部では捲舌音であると言う。」という文章があるが、この文章の主語がはっきりしていない。前後の関係から-LL- が主語であることがわかるけれども、とにかくⅣ)の冒頭の部分なのだから、主語の明示は必須だろう。それから「背舌口蓋音」ということばが用いられているが、これをはじめて見た時 評者は「舌背口蓋音」のミスプリントかと思ったが、実は伊藤氏独自の訳語であるようだ。日本の音声学ではふつう「舌背」としていることを評者としてはぜひとも指摘しておきたい ところである。また「捲舌音」ということばも出ているが、我々東京の人間には これはいわゆる「ふるえ音」と解釈されてしまうが、伊藤氏は実はこの訳語によって「そり舌音」を指して居られる ようだ。伊藤氏がぜがひでも これらの独創的な訳語に固執するとおっしゃるのなら話は別だが、そうでなければ服部四郎：音声学、東京、1951を熟読されるよう おすすめしたい。

P.38の1.9には「破擦音」ということばが出ているが、この「察」は誤字である上に、ここは どうしても「破裂音ないしは破擦音」としないと不正確のそしりを免れ得ないだろう。

しかし南イタリアにおける、-LL- の変化結果としての有声・そり舌・破裂2重子音に特に注目して居られる点は正しいと思う。この奇妙な音についてAlarcos: *Fonología Española*⁴, Madrid, 1965のP. 248には「調音の強調」であると書いてあった。しかし評者はこの奇妙な音がラテン語の-LL- からなぜ生まれて来たかについて定見を持っているわけではない。

Ⅴ) ではいよいよイベリヤ半島における-LL- の変化結果の分布状態に話が進む。その冒頭の文章は、「イベリア半島に於けるlambdaicismusでまず目につくのは語頭のl- の二重子音化である。」である。いったい「語頭のl- の二重子音化」とは何を指すものなのか？ ここでは表記ll- との混同があるように思われる。「語頭のl- の口蓋音化」とするのが正しいのではなからうか？

P.38の1.29には「・・・,Castilla語ではl- (<l-) はl- <- pl, cl-, fl- と対立する為に消失し、・・・」とあるが、カスティーヤ語ではラテン語のL- が一度l- になってそれからφになったような印象を読む人に与える。Martinet がこのようなことを言うはずがないから、「・・・,Castilla語ではL- は - <PL-, CL-, FL- と対立するためにそのままl- として残り、・・・」とすべきである。なお言うまでもなく-plはPL- のミスプリントである。またP.39の1.1では「pl, cl-, fl- 」と書かれているが、これまた「pl- 」とならねばならない。

前に戻ってP.38の1.31を見ると、「これに対しM. Pidalは、Asturias方言では^ttsuna と ^ttsamarで対立する所もあるから、Martinetの説明は失敗であると言っ

てはいるが、別に“決定的な説明”をしているわけではないのである。」とあるが、ここで伊藤氏が述べて居られることは、Catalán: Dialectología y estructuralismo diacrónico MISCELANEA HOMENAJE A ANDRE MARTINET 3. 69-80 (1962)に対するAlarcos, 1965のP. 250における反論と偶然同趣旨のものであり、評者も正しいと思うが、「*ʦ*una と *ʦ*samarで対立しない所もある」が正しいのではなかろうか？また上記Catalánの論文にはぜひ眼を通していただきたいと思う。

P. 39の1.4になるとMenéndez Pidalの言が紹介され、「・・・イベリア半島の四つの方言つまりCataluña, Aragón, Castilla, Leónのみが-ll-を弛緩して-l-とならず口蓋化によって強張⁴⁾している事実を上げ、イタリアのOsco-umbria方言に因るものと説明しているのは一貫して変っていないのである。」とある。評者がおもしろいと思ったのは「強調」ということばを使わず、わざと「強張」と書いて居られる点で、この訳語は妥当だと考える。ただし注の①を見ると、「口蓋化全てが強張なのではない。筆者は、調音方法に関して言えば、捲舌音による口蓋音は強張だと考えるが、この場合の背舌湿音は弛緩だと考える。」とある。ところがAlarcos, 1965のP. 248を見ると、「はたまたその調音の強調が舌背の接触面を広めた(故に〔ʎ〕や〔ɸ〕のような舌背・口蓋音が生まれたのである。)」と書かれていて伊藤氏の説とは真向から対立することになる。評者はむしろAlarcosの考えに賛成したいが、伊藤氏のお考えはどうであろうか？

VI) ではロマニヤにおける-LL-のそり舌音化が、主としてMenéndez Pidalへの反論の形で取り扱われている。

まずP. 39の1.10で伊藤氏は「他の西Romaniaは全て、-LL-に関しては、背舌面による口蓋化が起り弛緩⁴⁾の結果を示しているのも事実である。」としてここでも-LL- > -ʎ-を弛緩と解釈して居られる。さらに注②を見ると、-LL- > l, y (sic)などはケルト語に共通の弛緩現象だとする学者が多い。」と書かれている。しかし評者などの在来の常識から言うならば、伊藤氏の言われる強張と弛緩と、ケルト語に起こった軟音化現象とは区別さるべき性質のものであって、-LL- > l, yは2重子音が単子音化したという意味において軟音化なのであり、-LL- > -ʎ-はなるほど単子音化したという点ではたしかに軟音化だが、/l/との区別において/ʎ/と口蓋音化した点では強張なのである。

さきほど「Menéndez Pidalへの反論」と書いたが、Menéndez Pidalは何とかなり南イタリアと北スペインとを関係づけたいがために、双方に-LL-のそり舌音化のみならず、母音間の無声破裂音が有声化していないという事実をも挙げているが、伊藤氏はこれに対しAsturias方言においては母音間の無声破裂音は有声化しているとして反対して居られる。この反論は全く正しい。しかし評者には「それに、-p-, -t-, -k- は-ll- と系列の違う音素であるから、-nn-, -rr- などと一

緒に扱われる可きではないと思われる」という 1.19-21のご発言は勢い余って行き過ぎたという感じがしないでもない。最後に評者が述べることではあるが、「1つの音素の変化は同一体系内の他の諸音素との関連において把握されねばならない」という構造主義的言語観からすると、上の発言はあまり妥当ではなくなるのである。ただしこの文脈だけで見る限りにおいては決してまちがってはいないことも付記しておく。

P.39の 1.22以下では-ll- のそり舌音化と口蓋音化との関係がとり上げられている。伊藤氏のお考えではそり舌音化は-ll- の強音化の結果であることになるようだ。恐らくそれは正しいだろう。この点においてはAlarcosの考えと同じようである。ただしAlarcosは-ll- > -ʎ- をも強音化の過程と考えている点は異なるが。

それに次いで「そり舌音は非常に稀であるから南イタリアと北スペインと稀などうして結びつけ、北スペインのそれは南イタリアからの借用であるとする必要はない」旨の伊藤氏の発言は正しいと思われる。しかしそのあとP.40の 1.1にやはり勢い余って「多くの歴史的事実からすれば、一旦弛緩すれば次に強張の調音を取るのが困難であり、・・・」という伊藤氏のご発言があるが、これは賛成できない。弛緩しつ放しでは最後には音が全部無くなってしまふかもしれない。評者は1963年マドリードでStrasbourg大のStrakaの講演を聴いたが、彼はその講演の中でフランス語音韻史を例にとって言語史の上で強張と弛緩とが何度も何度も交替することを見事に証明して見せたのをはっきりと記憶している。音韻史はもっと広い視野を持って、長い目で見なければならぬ。

P.40の 1.6 からLausberg の言が引用されているが [ǰǰ] [dǰ] の間に<の記号が抜けている。たしかに現在のスペイン語には著しい弛緩の傾向が認められるが、この先いつまでも弛緩が続くわけのものでもなく、いつかは必ず揺り返しとしての強張の時代がやって来るはずである。

VII) は主としてレオン方言の中のBable方言における そり舌音化その他がとり上げられている。Bable方言の一部に認められる そり舌音化をMenéndez Pidal はやはり南イタリアからの移植とするのだが、伊藤氏はもちろん これには反対である。「史実」を持ち出されただけではやはり我々には眉唾ものとし映らないのである。

なおP.40の 1.18にTeberga という地名が引用されているが、正しくは Teverga ではないだろうか？評者がスペイン留学中 Alarcos が Oviedo の Teverga という通りの 1番地に住んでいたのでよく記憶しているのである。1.25にはZ.Vicente と書かれているが、これは Zamora ないしは Zamora Vicente が正しい。また「ラムブダキスムス」と書かれていたり、lambdacismus と書かれていたりするが、いずれかに統一してほしいものだ。

VIII) はこれら Bable 方言の中の そり舌音の小島についての諸家の説の紹介であるが、諸家の説は紹介されていても、出典が明らかでないことが多く、何とも嘆かわしい次第である。

IX) はこの論文の中でも最も重要な部分であり、「どのように-LL- が種々の変化を生むに至ったか その過程」が説明されている。ここで伊藤氏は補足的に-LL- > -ld- の説明から始めて居られるが、一度もこれが異化の現象に相当するということが言われていないのは いったい どういうわけだろう。

さて肝腎の-LL- の変化過程だが、これはP.43 の上部に掲げられていて、

$$-LL- > l-l \begin{cases} \nearrow \alpha \\ \searrow \begin{matrix} \hat{d} \gamma > t < \begin{matrix} \hat{b} \\ \hat{c} \end{matrix} \\ l \beta > r \end{matrix} \end{cases}$$

となっている。しかしこれによると t から \hat{b} (=ts) または \hat{c} (=tj) が派生したように解釈できるが、Alarcos, 1965 の P.249 によると、[t̂], [t̂ʰ], [ĉ], [t̂] はお互いに平行的に [d̂] から派生したものとされている。伊藤氏が独創的な自説を出されるのは結構なことなのだが、それと相反する説には残らず眼を通し、かつ批判した上で自説を出すのでないと どうしても説得力はなくなってしまふ。

最後に Menéndez Pidal の南イタリアからの移住説が最終的に否定され、「思うに、この様な変化は自然発生的に、イタリアの南部でも、ピレネー山岳地帯でも、Asturias地方でも、独立して起きた現象であろう。」という結論が出ているが、評者はこの結論には賛意を表したい。

X) は僅か 4行から成る「結びのことば」である。Menéndez Pidal 存命中はスペインでもこの碩学に反論を出すことは なかなか難しかったようだが、彼の死後は徐々に色々な反論が出て来ることだろう。

以上伊藤, 1973a を章ごとに順を追って紹介・批判して来たが、最後に全体を通して評者が感じたことを書き連ねておこう。

やはり研究論文というものは予め どこかの権威ある学会または研究会で口頭発表をして、聴衆の質問を受け、発表者の気づかなかった点を聴衆に指摘してもらってから論文の形で文章に直した方が ずっとよいと思う。こうすると発表者の独断が避けられるからである。研究発表を口頭で行うと、発表後の聴衆からの質問ないしはコメントに思わぬヒントを与えられるといった利点がある。

Menéndez Pidal の南イタリアから北スペイン移住説を論破しようと思ったら、やはりラムブダキスムスについてだけでは弱いと思う。原, 1970 の中でも紹介されているが、彼の移住説の論拠となっている現象には伊藤氏言うところのラムブ

ダキスムスの他に、metafonía の現象、中性の物質名詞、-MB- > m (m) , -ND- > n (n) , -LD- > l (l) , m, n, l, r のあとの p, t, k の有声化などがあり、また Dámaso Alonso: La fragmentación fonética peninsular Suplemento al tomo I de la E. L. H., Madrid, 1962 の p.p. 105-154 にある第10章 Metafonía, Neutro de materia y Colonización suditaliana en la Península Hispánica によれば この他にまだ ④人間を表わす直接補語の前に a を用いる、⑤指示詞の三分化、⑥いくらかの語彙と TENERE の用法 などにも共通点が見受けられるという。伊藤氏はこれらの項目全てについて論駁をせねばならなかったはずだ。もしそう なさらない にしても、今 引用したばかりの D. Alonso, 1962 だけはせひとも読んで いただきたかった と思う。

もう一つ、これが評者にとっては最も伊藤氏に申し上げたかったことであるが、-LL- の変化結果はどうしてもラテン語に本来あったと想定される軟音化の過程の1つとして考えてほしかった。これについてはせひとも Alarcos, 1965 の p p. 241-251 を熟読せねばならない。-LL- > -d- も軟音化と解釈するのか という異論が出るかもしれないが、評者は敢えて そう解釈すると答える。それはこれまた2重子音の単子音化の過程と考えられる からである。-LL- > -dd- と2重子音のままだったら もちろん軟音化とは考えられない。

さてこの軟音化現象を Alarcos に従って少し詳しく説明しよう。まず両唇音系列を例にとると、ラテン語から スペイン語への移行過程において次のような変化が起こったと推定されている。

$$\left. \begin{array}{l} -B- \\ -V- \end{array} \right\} > -\beta - \quad (> \phi)$$

例: BIBĒRE > beber

VIVĒRE > vivir

SABUCU > sabuco, saúco.

RĪVU > río

この変化が起こると有声・破裂の [b] の部分が空白になってしまう。この空白を埋めるべく

$$-P- > -b-$$

という変化が起こる。

例: CEPULLA > cebolla

(今でこそ -bo- の部分は [-βo-] と発音されているが昔は [-bo-] と発音されていた)

そうするとこんどは無声・破裂の [p] の部分が空白になってしまう。この空白を埋めるべく

$$-PP- > -p-$$

という変化が起こる。

例：CAPPA > capa

この変化は同様にして歯音系列、軟口蓋音系列にも起こった。

-D- > -ð - (> ø)	SUDARE > sudar
	CREDIT > cree
-T- > -d-	VITA > vida
-TT- > -t-	SAGITTA > saeta
-G- > -γ - (> ø)	NEGARE > negar
	LIGARE > liar
-K- > -g-	SECURU > seguro
-KK- > -k-	VACCA > vaca

これが普通軟音化と称されている現象であるが、この軟音化現象は以上にとどまらない。以下その他の例を挙げて行こう。

-SS- > -s-	MASSA > masa
-S- > -z-	CASA > casa ['kaza]
-MM- > -m-	FLAMMA > llama
-M- > -m-	FUMU > humo
-LL- > -l-	VALLE > valle
-L- > -l-	DOLORE > dolor
-NN- > -ñ-	CANNA > caña
-N- > -n-	BONU > bueno
-RR- > -r-	CARRU > carro
-R- > -r-	CARU > caro

-MM- と -M- との場合は例外的に両者の変化結果が合一してしまったが、その他は s, l, n, r に関しては兎事に2重子音と単子音との区別が別の形で保たれている。この大規模な軟音化現象をケルト語の基層によるものとする親玉は何といっても Martinet であるが、評者はこれには反対である。その理由を簡単に挙げるならば、

- ① 年代的差違
- ② 非ケルト地域にも この現象あり
- ③ ü がスペインにない
- ④ 基層説が成立し得る歴史的・文化的・社会的事情なし
- ⑤ 大陸ケルト語の実体不明確
- ⑥ ラテン語本来の傾向として説明可能。

となる。伊藤氏にもこの規模のスケールで「ラムブダキスムス」を捉えてほしかった。事実伊藤氏の論文の中にはこのような捉え方をし得る萌芽のようなもの

が充分感じられるのだが。評者がそういった萌芽を感得できた部分を伊藤, 1973a の中から拾い上げておくと、

④ P. 35, ll. 9-11

「と言うのは、実は、ロマンス語への発展段階で音韻史上問題になるはずの $n \Leftrightarrow mn$ の関係に言及する術語が恐らくないし、又、 $r \Leftrightarrow rr$ の関係もネオラテンの諸語では考察の大きな対象となるのに、それを暗示する術語がないからである。」

⑤ P. 38, ll. 20-22.

「又、同時に注目に価するのは、基層説支持と否とに関らず、ケルト語の特質となっている多くの弛緩現象の上にラテン語が導入された事である。」

⑥ P. 39, ll. 19-21.

「それに、-p-, -t-, -k- は -ll- と系列の違う音素であるから、-nn-, -rr- などと一緒に扱われる可きではないと思われる。」

⑦ P. 44. 注⑤

「ll > l, y などはケルト語に共通の弛緩現象だとする学者が多い。」

最後にこれまでに指摘しなかった誤字を挙げておく。

P. 36, l. 6. 義論 → 議論

P. 37, l. 15. 侵透 → 浸透

P. 38, l. 2. 安じられる → 案じられる

P. 40, l. 3. それ由 → それ故

P. 41, l. 25 接融面 → 接触面

P. 43, 注⑤ 音韻方則 → 音韻法則

B. 伊藤, 1973b

伊藤氏の次の論文へ移ろう。

I) ここでは序論として言語学上の大変大きな問題、しかも永久に解答の出さうもないような問題がとり上げられている。「言語はなぜ変化するのか」という問いに対して、伊藤氏はその答は未だ明確ではないとしながらも、「言語は常に創造的でなければならぬからだ」というあたかも Humboldt を思い出させるような答を伊藤氏なりに出して居られる。このお考えを評者に論評せよと言われても、「わからない」としか答えられない。評者にはどうてい手に負けない問い掛けであるというのが偽らざるところである。

しかしそのあとで伊藤氏がやって居られるように、「言語はなぜ変化するのか」の「言語」の部分を語彙面、統辞面、音韻面に三分した場合には、問題がより

具体化して来る。伊藤氏はこの三つの中で最も変化し易いのは語彙面であり、次が統辞面、最も変化しにくいのが音韻面であるとして居られるが恐らくそうであろう。だから逆に言えば、変化しにくい音韻面の变化だからこそ我々の注目を最もひくのだというふうにも言えるであろう。評者がスペイン語通時音韻論に いささかなりとも興味を抱いているのも一部は、否大部分はこの故である。

ただ伊藤氏は同じ箇所ですべて「・・・統辞体系は人間の思考方法（様式）に最も関与するものであり、・・・」と言って居られるが、これは有名な Sapir-Whorf の仮説と呼ばれている言語学上の重要かつ大胆な仮説である。評者はこの点に関しても慎重な態度をとりたく、現在のところこの仮説に対してはむしろ否定的な考えを持っている。従ってこういった大問題に対し率直な態度をとれる伊藤氏をある意味で羨しく思う。

そこで伊藤氏は最も変化に乏しいはずの一言語の音韻体系はなぜ変化するかという問題に焦点をあてる。これについては「一言語の音韻体系は将来如何なる様相を呈するまで変革進展するか、さらに、言語は将来どの様な形態を取るかは興味のあるテーマではあるが、歴史言語学の範囲ではなく、言語学の分野だけでは解決できる問題ではなく、残念乍ら、人間が自ら設けた永遠に不可解な謎の一つである。」という文章が冒頭に置かれている。これは評者には大変耳の痛い言明である。というのはここで伊藤氏が不可解として居られることを、評者は部分的ではあるが原 誠：スペイン語発話の音声学的一大特徴——スペイン語音素論（その9）——「一橋論叢」59. 50-67 (1968) および原 誠：中南米のスペイン語（その7）——メキシコ・シティのスペイン語——「イスパニカ」14. 20-35 (1969) の二論文において試みているからである。しかしこれら二論文ともに「言語外的要因が介入しない限り」という但し書きであるからその点では問題はない。

次には「一定の時代の音韻の共時的体系は、必要だからといって、即座には、否、ある程度の準備調整期間をおいても、過去の体系の一部を、歴史的時間の不連続を飛び越えて、借用し運用することは、歴史上嘗てなかったことである。」ということが述べられる。その例証として日本語の /p/ > /f/ > /h/ とスペイン語の /b/ が引き合いに出されているが、後者の方にはちょっと問題があるようだ。つまり伊藤氏は現代スペイン語の /b/ は歴史的には二つの異なる音素、すなわち有声閉鎖音の /b/ と有声摩擦音の /β/ から派生すると言って居られるが、D. Alonso, 1962 の第XI章「イベリヤ半島における B = V」において北スペインにおける /β/ の存在が疑問視されて来ている以上、/β/ を /w/ または /β/ と表記すべきだったのではなかろうか？ このように言うと評者はラテン語に音素 /w/ を認めるのかという反論が出て来ると思うが、評者としては今は音素解釈の問

題は詳しく述べたくはない。この件についてはどうか 原 誠：スペイン語音素論（その5）——スペイン語のいわゆる半母音の音素論的解釈についての再考「一橋論叢」56. 154-174 (1966) を見られたい。いずれにせよ評者はラテン語にも/w/を認めるものであることだけはここで述べておこう。従って P.76, 1.1. の/v (=u) /という伊藤氏の表記にも賛成し難い。

I) の最後に、この章で伊藤氏が出して居られる結論を紹介するならば、

① 音韻体系の幅は狭く、実際に発音可能な音声の数に限りがある。

② 同一音韻体系は繰返されない

となる。なお②の付記として「基本的な部分は、時代的にも地理的にも同様に大差ない」ということが述べられているが、これは評者が 原 誠：スペイン語通時音韻論の一傾向「言語研究」58. 20-38 (1971) で出した結論とやや似ているようだ。

II) は音韻変化の原因についての Bustos の説の紹介である。伊藤氏は Bustos のことを E. B. Tovar と書いたり、ただ単に Tovar と書いたりして居られるものだから、評者ははじめてこの論文を読んだ時、ローマ移住以前のいわゆるイベリヤ語の研究と中南米の原住民諸語の研究とで名高い元サラマンカ大学 学長 Antonio Tovar のことかと勘違いしてしまった。評者は 1962年から1963年にかけて Madrid大学において Lapesa教授の代講をつとめた Bustosの講義——非常につまらなかった——に出席していたが、スペイン人学生が彼のことを みな Bustos と呼んでいたので間違いはない。彼のことを Tovar と書くのはどうかおやめいただきたい。

さて Bustos の音韻変化の原因がきれいに図表で紹介されたあと、伊藤氏は「言語（の音韻）体系自身の内的変革を顧慮すべきであろう」と批判して居られるが、この批判には評者も大賛成である。しかし残念なことに、この伊藤氏の論文を読み進むと わかって来ることであるが、伊藤氏ご自身がこの内的変革を充分顧慮して居られるようには どうてい思えないのである。

III) では それ以下でラテン語の子音群 /-kt-/、/-ks-/、/-kl-/ のスペイン語における口蓋化が取り上げられることが明らかにされる。

IV) は上記三子音群の音声学的説明にあてられている。そして付随的に /ɣ/ と /ɣ̃/ についても上記三子音群に関連ありとして音声学的説明が与えられるのであるが、/ɣ/ については —— もっとも伊藤氏は /g/ と表記して居られるが ——、SECURUの -c- が有声化して出現した /g/ と音素論的に対立していた NEGARE の -g- に由来する /ɣ/ のことではないようだ。前記三子音群の中の -c- に由来する /ɣ/ らしいので、この点を伊藤氏はちょっと注記しておくべきだったと思う。また /ɣ̃/ についても、やはり問題があり、評者なら さきに引用した 原, 1966の

結論に従って /y/ と表記するところである。伊藤氏は mayo までも /maio/ と音素表記なさるのであろうか？ その意味で注4) と注37) も同様に評者には納得し難い。

また P.78 で唇の形に関連して /ɲ/ が /ç/ や /ʝ/ と比較されているが、/ç/ の例を見ると *noche* の -ch- であり、/ʝ/ の例を見ると *cónyuge* ——ただし伊藤氏は *conyuge* と書いて居られる——である ——注6) および注7) による——から、ここでも その昔スペイン語音素論を専門とした評者としては一言文句をつけたいところである。まず /ɲ/ を /ç/ や /ʝ/ と比較すること自体不適當である。コンテクスト から判断するとこれは [ɲ] を [ç], [ʝ] と比較すべきであった。[ɲ] は 半子音 (Navarro Tomás の用語を借用)、[ç] は子音 (母音間)、[ʝ] は同じく子音だが [ç] の破擦音化したものをそれぞれ指す。さらにここは音声学的説明なのだから、音素表記 // よりも音声表記 [] の方が適當である。また /ʝ/ は 筆者の音素表記なら /y/ となってしまう。/ɲ/ と /ʝ/ とのそれぞれの異音にはどんなものがあるのか伊藤氏にせひうかがいたい ところである。最後に /ç/ と /ʝ/ とは評者の解釈では無声 —— 有声のペヤを成さないことを述べておきたい。このことについては この論評を書いている1973年8月20日現在 未だ評者は論文の形には直しては いないものの、1972年11月12日 (日) に関西外国語大学で開催された第67回 日本言語学会大会における評者の口頭発表「スペイン語の *rehilamiento* の音声学的実体」を伊藤氏は聴いてくださったのだから、もう少し慎重なご配慮がほしかったと思う。つまり /ç/ の有声のペヤ /j/ (=d₃) には *rehilamiento* があるが、/ʝ/ (=j) には *rehilamiento* がないというのが評者の主張であった。その意味では /ç/ を /ʝ/ としておかれたらよかったのである。従って 注②は正しい。なお伊藤氏は /ʝ/ = [d₃] のつもりだったと評者に反論なさるかもしれないが、それだったら この場で /ɲ/ と、/ç/ および /ʝ/ とを対比するのはやはり不適當という結論になってしまう。

P.78 の下の方ではこんどは /l/ と /ɻ/ との音声学的区別の説明がなされているが、やはりここでも音声表記を用いて [l] と [ɻ] とすべきだったと思う。

P.79 の /s/ の音声学的説明でも *grave*, *acute* の和訳がそれぞれ「低調音」、「高調音」となっているが、ヤコブソン、ファント、ハレ共著、竹林滋、藤村靖共訳「音声分析序説」、東京、1965のP.49ではそれぞれ「低音調性」、「高音調性」と訳されて居り、伊藤氏独自の訳をなさらないでも、これに従っておいてもよかったのではなからうか。ついてながら Delattre だったと思うが、*grave* —— *acute* の弁別の特徴は現在では音響学的に不適當とされて居り、そのせいか Chomsky & Halle: *The sound pattern of English*, New York, 1968 でも用いられていない。しかしもしこの特徴が伊藤氏のご説明にとって有用であるならば、大した問題

とはなるまい。

P.79, 1.28 に「齒茎摩擦側音」という術語が出ているが、側面音 λ には普通の場合「摩擦」ということばは付けない。

P.80. 1.6 はよく意味が通じない。

V) 前記三子音群から yod が生まれた過程の説明がここで行われる。まずこれらの過程が、同化の過程であることが Bustos, 1960 および Menéndez Pidal の Manual からの引用によって述べられる。

次に Bustos のこの変化に対する解釈が数式の形で示される。

α) $ct > \check{y}t > y\check{t} > y\hat{c} > \hat{s} (= \hat{c} = ch)$

β) $cs > \check{y}s > y\hat{s} > \check{s} (= j)$

(β) における \hat{s} は伊藤氏も指摘して居られるとおりの \check{s} の誤りだろう)

その次は Menéndez Pidal の解釈が引用される。

γ) $ct > kt > \check{y}t > yt > y\check{t} > y\check{t}\check{y} > y\hat{c} > \check{1}\hat{c} > \hat{c}$

δ) $cs > ks > \check{y}s > ys > y\check{s} > \check{s}$

ϵ) $c'l > g'l > yl > \check{1}\check{\lambda} > \check{\lambda}$

伊藤氏は α), β), γ), δ) には問題はないとして居られるが、 ϵ) だけは問題があるとして居られる。その理由は この場合だけ なぜ $c > g$ と有声化せねばならぬのか ということにある。これに対して Menéndez Pidal ははっきりとした解答を与えていない。

次にまた Bustos に戻って、

3) $cl > \gamma l > \check{1}\check{\lambda} > \check{\lambda}$

が引用される。しかし P.84 の 1.7 で伊藤氏が説いて居られるところから判断するとどうやらこれは、

3) $cl > yl > \check{1}\check{\lambda} > \check{\lambda}$

が正しいようだ。また Bustos の原著 P.128 を見ても同様である。

かくして伊藤氏の、Bustos に対する批判としては α) と β) の第二段階と 3) の第二段階とがピッタリ一致して 無理に整然性を狙っていること、同じく第二段階について α) と β) では y と表記されているのに、3) では γ である理由がわからない の二点が挙げられる。

また 3) の $cl > yl$ の間にはもう一段階必要だとの批判から、三子音群のいずれも、相連なる二つの子音の間に音節の切れ目があることに話題が移っている。

要するに Bustos の解釈を簡単に図示するならば

$$\left. \begin{array}{c} L \\ \gamma + S \\ T \end{array} \right\} \text{ 有声化 } \dots \left\{ \begin{array}{c} \check{1} \\ \check{\lambda} \end{array} \right\} \left\{ \begin{array}{c} \check{1}\check{\lambda} \\ \check{1}\check{s} \\ \check{1}\check{t} \end{array} \right\} \square \text{ 蓋化 } \dots \left\{ \begin{array}{c} \check{1}\check{s}\check{s} \\ \check{1}\check{s}\check{t} \end{array} \right\}$$

となる。この表についての伊藤氏の批判は、第一に、スペイン語の音素体系に /γ/ が無い といふ乍ら、何故その存在を認める必要があるかという点、第二に、u という音素を図示し乍らも何らそれについて言及が無い の二点にある。評者はこの伊藤氏の批判は両方とも当を得たものだと思ふ。さらにこのあと P. 85 の下方から P. 87 にかけて伊藤氏独自のお説が展開されるのである。伊藤氏は上に引用した Bustos の表の中の \underline{u} に何ら説明がないことにヒントを得られて、

$$k > \underline{u} > \underline{i}$$

という過程を考えるという独創的な解釈をして居られる。そういう観点に立つならば、α) と γ) とは

$$\eta) ct > \underline{ut} > \underline{it} > \underline{it} > \hat{c}$$

と書き換えられ、β) と δ) とは、

$$\theta) cs > \underline{us} > \underline{is} > \underline{is} > \hat{s}$$

と書き換えられ (ただし第二段階と第三段階でそれぞれ u, i と書かれていたのが評者の判断で勝手に \underline{u} , \underline{i} と訂正した)、ε) と ζ) とは

$$\iota) cl > \underline{ul} > \underline{il} > \underline{il} > \hat{l}$$

と書き換えられる。さらに第二段階の / \underline{u} / と第三段階の / \underline{i} / (これらの音素表記はいずれも評者の趣味に合わないことは前述のとおり) の間には時間的隔たりがあるわけではない という理由で、η), θ), ι) は κ) にまとめられている。

$$\kappa) \left. \begin{array}{l} ct \\ cs \\ cl \end{array} \right\} > \left\{ \begin{array}{l} \underline{u} \\ \underline{i} \end{array} \right\} + \left\{ \begin{array}{l} t \\ s \\ l \end{array} \right\} > \left\{ \begin{array}{l} \underline{it} \\ \underline{is} \\ \underline{il} \end{array} \right\} > \left\{ \begin{array}{l} \underline{it} \\ \underline{is} \\ \underline{il} \end{array} \right\} > \left\{ \begin{array}{l} \hat{c} \\ \hat{s} \\ \hat{l} \end{array} \right\}$$

そして最後に /k/ > / \underline{u} , \underline{i} / の過程は弛緩の結果であることが述べられ、さらに「一共時の音韻体系にない別の音素」としての / \underline{u} / の存在を正当化する議論が披露されて、第 V) 章が終わっている。

伊藤氏の創見に対する評者の考えを述べなければならぬ。一口で言ってしまうと、Bustos の説であれ、Menéndez Pidal の説であれ、伊藤氏の説であれ、どれでもないか、これは大した問題ではない ということになる。その理由もまた一口で言うならば どの説を取るにせよ いずれも文書での確認が不可能だから ということになる。伊藤氏ご自身も P. 86 においてちゃんと「・・・それは、実は、この発音の変化は、M. Pidal の言う様には何世紀もかけて行われたのではなくて、突然変異的に限られた年代内で行われたが為に、実例が殆んど無いと言えるし、・・・」と率直に認めて居られる。だからこそ P. 88 において「即ち、一共時の音韻体系にその時存在しなくても、音声学的に可能な音声ならば、次の段階の共時体系で生れる可能性があるという事である。」といったやや神秘主義的な見解を表明せざる

を得なくなるのである。同じページの下の方では「我々が今問題にしている wau は、変化の過程に於ては、時間的には極めて生命力が短く、蜂游の様な存在ではあるが、・・・」とも書かれていて、あまりに抽象的で全く賛成できないところの生成通時音韻論の手法をほうふつとさせる。評者にとっては伊藤氏の /u/ は人によっては音声学的に必然的だということになるかもしれないが、また別の人にとっては必然的とは言えないということになるような気がしてならない。だからこそ先刻どうでもよい問題だと言ったのである。ただし駄足として伊藤氏のお説に有利な例を評者が知っている限り挙げておくと、

Menéndez Pidal: Manual¹¹, 1962 の P. 144 の脚注(4) [P143からの続き]

carácter > caráiter, caráuter

efecto > efeuto

Malmberg: Structural linguistics and human communication, Berlin, 1963の

P. 134 doctor > doutor

などがある。

とにかく評者としては これら三子音群の変化については伊藤氏に次の二つの事を全てに先がけて せひ言っておいてほしかったと思う。その二つの事とは、

① さきに述べたとおり、これら三子音群の単子音化もまた、-PP- > -p- のような二重子音の単子音化と同様、ラテン語からスペイン語にかけての変化の際起こった単純化の一環として捉えられるということ、従って /y/ なり /w/ なるの半母音的要素が子音群の第一要素から現われたということは、その半母音的要素が先行母音と結びつくことによって、残りの第二要素が単一の子音として残るといふふうに解釈される。

② Alarcos, 1965 の P. 233 に書かれているように、ラテン語の子音体系にあっては硬口蓋序列が完全に広いあきまを埋めんとする言語の自然のはたらきであったということ。

以上二つの事項、余りに構造主義的に過ぎて伊藤氏のお気に召さないかもしれない。

次に他人の批判ばかりして、自分の説がない というのは片手落ちであるから、評者のこれら三子音群の変化についての解釈をあまり積極的にでなく——それはこの問題を大した問題として捉えていない からなのだが——披露しておこう。

伊藤氏は P 90 の 1.1 において Lausberg の /ç / > /ç/ の解釈は少々無理を伴うとして居られるが、実は評者はこの解釈をとる。従って -CT- , -CS- については Bustos や Menéndez Pidal の解釈、なかんずく Menéndez Pidal のそれに賛成する。その際 K > ç は前寄りの子音 T や S への同化、また ç > ç は無声子音が二つ並んだための異化と単子音化のための半母音化と解釈する。また

-CL- についてはちょっと稀かもしれないが、

-CL- > -ç l- > -i_l- > -l_k- > -l-

という解釈をとる。この場合は -ç l- > -i_l- の部分は前者とは反対に同化となる。このようにして見ると、評者は伊藤氏の提唱される $K > \underset{u}{u}$ の間にまだ中間的段階があるように思う。評者はそういう解釈はとらないけれども、どうも $K > \underset{y}{y} > \underset{u}{u}$ とでもした方がよいような気がする。伊藤氏のようにいきなり $K > \underset{u}{u}$ は無理があるのではないか。また伊藤氏は Bustos の求めた整然性を非難して居られるが、ご自分もまた別種の整然性をお求めになってように見える。

最後に評者が気づいた細かい問題を二つばかり。

P.86, l. 9 ACTU - > auto は非常に珍しい例である。しかしこの例があるからといって $-K > -\underset{u}{u}$ という規則化はできないだろう。

P87, l.5 k) においてさきに評者が付した(H)の記号の部分に $\underset{u}{u}$ があって、(H)にないということは、伊藤氏の真意はかるにしてもやはり k) の一元化に無理があるような感じを起こさせる。

VI) まず何はともあれ VII) と書かれているのを VI) と訂正せねばならない。この章では伊藤氏の主張をより明確にするために、さらに別の、立場を異にする学説に論評を加えることが主たる目的となる。まず Meyer-Lübke に代表されるケルト語基層説が Bustos の反論を借りて批判される。ただし Meyer-Lübke が [x] という中間的段階を認めることには伊藤氏は賛成して居られるようである。従ってさきほど評者は伊藤氏の $/K/ > /u/$ の間にはもっと中間的段階があるのではないかと述べたが、伊藤氏もその間に何かがあることは認めて居られるようだ。

次に Lausberg の $/ç/ > /i/$ 説が槍玉にあがるが、これについてはすでに評者は賛成であることをさきに述べた。[ç] と [j] とは無声-有声のペヤを成しているからである。

P.90 になると再び基層説への反論が展開されている。伊藤氏が基層説に最も疑問を感じて居られる点は時間的へだたりである。これには評者も賛意を表すが、これについては Jungemann: La teoría del sustrato y los dialectos hispano-romances y gascones, Madrid, 1955 の第IX章ですでに述べられているところである。もう一つの伊藤氏の、基層説への疑問は地理上の範囲である。これを論拠として、ケルト語およびアラビヤ語のスペイン語への音韻的影響を否定して居られるが、これも正しいと思われる。なお地理上の範囲のくいちがいを理由としてケルト語のスペイン語への影響を否定している書物として Bustos, 1960 がある。またアラビヤ語傍層説に関連して伊藤氏はスペイン語の $F- > h- > \emptyset$ を、

カステイヤー語の音韻体系内の自然発生つまり弛緩現象と考へて居られるが、これにはさすがの構造主義者の評者もついて行けない。この場合はさすがの評者も基層説を認めざるを得ない。これについては Jungemann, 1955 の第 X VI 章, Alarcos, 1965 の pp. 254-257 を見ていただきたい。

この章は P.92 の 1.5 までで終わっているが、このように基層説を批判して来た伊藤氏は、故に音韻体系内の緊張交替説を提唱するのだと結んで居られる。

VII) これらの音韻変化がいつ起こったのかについて伊藤氏の創見が述べられる。これについては相当詳細かつ克明に論考が行なわれているが、結論は P.94 の下の方の「つまり、 \hat{z} の前段階の c は 9 世紀末以前であり、 $\text{ct} > \hat{c}$ は 11 世紀前半であり、その間に $\text{cs} > \check{s}$ が入る事になろう。」という部分にあるようだ。評者が気のついたことを述べるならば、P.94 の 1.12 から「ただ気になるのは、前述の M. Pidal の § 100 に述べてある二つの事柄、つまり、11 世紀の段階では $-\text{CT}- > \hat{c}$ 及び $-\text{CS}- > \check{s}$ の方が、 $-\text{CL}- > \hat{z}$ より広い範囲に見られるという事である。」という文章があるが、これでわかるように同じ口蓋子音化とはいへ、 $-\text{CT}-$ 、 $-\text{CS}-$ の変化結果と、 $-\text{CL}-$ のそれとでは、評者の解釈でも相異なる結果が出たように、お互いちょっと異質なものがあるようだ。その理由の一つは $-\text{CL}-$ だけがその第二要素が $-\text{L}-$ と有聲子音であることに なるように思う。伊藤氏は P.95 の 1.6 以下で \hat{c} のきこえの方が \hat{z} のそれよりも大だから地理的拡がりの範囲に大小があるのではないかと述べて居られる。そうかもしれないし、そうでないかもしれない。全ては推測の域を出ないのである。

P.95 の結びのことばとして「これら三子音群の口蓋化を調音音声学的に捉えると舌の形が凹型から凸型に変わって、しかも中には凸型の頂点が軟口蓋まで後退しているものがある。」といった趣旨のことが述べられているが、そこまでおっしゃるのであれば、評者がこの論文の第 V) 章の論評で述べた重要な二点のうちの ㊦ のような捉え方をしていただきたかったと思う。

けっきょく伊藤, 1973a および 1973b を通じて言えることは、これらの論文がいずれもスペイン語史という狭い範囲内に閉じこもらず、常にロマンス語学という一段高いレベルでものを言っている ということ を まず挙げねばなるまい。評者もこの態度は正しいと思う。またいずれも創見に富んでいて、今後の伊藤氏の将来性を予言しているようで実に頼もしい。色々きびしい批判をしたかもしれないが、全て伊藤氏の将来性を評者が高く評価するから批判を遠慮会釈なく加えたわけで、将来性のない人の論文を論評することなど評者はするつもりはない。この点誤解のないように願いたい。

要するに伊藤氏以上に構造主義的であり、だいたいにおいて Alarcos, 1965 の見方に立つ評者の立場からは、伊藤氏とは少々ちがったが、「通時音韻論におけ

る構造主義をどう考えるか？」という大問題に対する態度を伊藤氏ははっきり決めねばならない段階に来ていると思う。伊藤, 1973b のP.88 の1.5 以下で、

「そして、それらの変化の原因は、間接的には勿論色々考えられようが、直接的には一定の共時に於ける音韻体系内の歪によるという事を主張して来た。又、同時に、その一つの歪が別の歪を生む事を考察した。」

と大変いいことを言って居られる伊藤氏のことゆえ、きっと評者の期待に応えてくださるだろうと確信している。

最後に伊藤, 1973b の誤植で今までに評者が指摘しなかったものをまとめて挙げておこう。

P.74, 1.2 未だ→未だ (P.93, 1.13 も同様)

P.75, 1.10 言い換えれば→言い換えれば

//, 1.26 /p/ > /f/ > h/ → /p/ > /f/ > /h/

P.76, 1.25 esbuerzo→esfuerzo (このミスはひょっとすると伊藤氏が予め訂正されていたのかもしれない。もしそうであれば重複をお詫びする。)

P.77, 1.11 能度→態度

P.78, 1.3 音系→音素

P.82, 1.9 我々とも→我々も

//, 1.19 Cartilla→Castilla

P.83, 1.7 異義→異議

//, 1.15 silgo→siglo

P.84, 1.9 比判→批判

//, 1.16 間して→関して

P.86, 1.3 伴に→共に

//, 1.18 中間的段階すして→中間的段階として

//, 1.24 子音素→子音音素

P.88, 1.7 困る→因る, よる

P.91, 1.6 学達→発達

P.92, 1.30 Orígenes de la lengua → Orígenes (del español)

P.93, 1.12 は不可解。

//, 1.27 不思議→不思議

P.96, 注27), 1.2 ……であ時るは→……である時は

//, 注32) Orígenes → Orígenes

P.97, 1.3 Emilio Llorach → Emilio Alarcos Llorach